

巻 頭 言

本報告は農林工学系報告第2号(1985)の続編ですが、構成については若干の変更を加えました。というのは学系報告が学系教官の研究活動の結果としての研究業績を集録するだけでなく、学系の教官が平素何を考え、何を目標としているかを少しでも盛り込むことができれば、多くの方々の本学系に対する理解を容易にするだけでなく、しばしば指摘される学系内のコミュニケーションの欠如を埋めることができ、ひいては学系の activity 向上に繋がるものと考えたからです。また、本号では、学系のあり方に関して「農林工学系将来計画検討委員会」の報告を含め、学系の教官ばかりでなく、学外の研究者の卒直な意見を拝聴するために座談会を開催し、ここに掲載することにしました。

さらに、本学系で定期的に行われている学系セミナーの課題の中から、最近のトピックスをいくつか選んで掲載することにしました。

また、本年度末で退官される井上、湯沢の両先生からは、長い間の研究生生活をふり返る、特別寄稿をいただきましたので、ここに集録しました。

さて、農材工学系は、いうまでもなく筑波大学創設とともに15年が経過しましたが、その研究・教育体制はユニークであるだけに、利点と同時に問題点も多く指摘されています。その1つは学系に所属する教官数が少ないことと、講座制でないため、研究の継続性や後継者育成に関して、若干の難点があるということです。しかし、最近の研究専門分野の細分化や多様化の中では、旧講座制時代のように、多くの研究分野をカバーしていたフラット型の研究組織から、むしろ高い峰をもつが谷間も多い、いわばアルプス型の研究組織へ志向せざるを得ないのかも知れません。そして、その谷間は大学間の交流、あるいは研究機関との交流で埋める必要があるのかも知れないと考える昨今です。

本号は、以上のように、本学系の研究活動の息づかいや動きを多少なりとも収め、記録したいという意図をもってしています。本報告が、多くの人々の本学系に対する理解に結びつけばと願っております。

最後になりましたが、本報告のため、わざわざ原稿をお寄せ下さったり、あるいは座談会に御出席下さり、貴重なご意見を下さいました学系外の諸先生方には心より御礼申上げる次第です。

1989年12月

農林工学系長 鈴木光剛